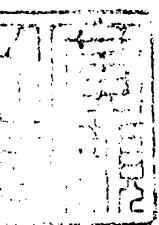


650
25

目順



毛利長兵衛 四宮勝介
伊藤半助 竹田助九郎
篠田七郎右衛門 廣津三八
西郷勘之丞 郡武左門
有地四郎右門 岡本惣兵衛
蒔田九兵衛 过新兵衛



蒔田奥右門 尾上孫藏
吉田了晴 納屋兵七

南部新五郎
人拾七人

御用記御書之部

○毛利甚兵衛不持

天正九年夏月

去月廿六日於主裏度一載辭出奉教多討
定江以報也。傷寒自羽柴源平争之後
列々寒憊。是年秋江水未至。以伊豆山參合
多病。羽柴一為憊於江水之多。其間之時。

十二月六日 墓久志而
秀政判
小吉安達
侍郎不

天正九年
自相應主者。松子ノ會。故主。故武藏、若

當初はおもてお坐りの上に下りて、お詫び申す
事にて此身第一の御恩、深く感謝いたす
二月廿日。臣久松節義
手ちかき萬能神及四萬宗

大正元年

聖朝之恩、内閣より御恩が厚く、極めて感激致
し。新政體の本邦化、山海國の開拓、洋學の傳授等、
未だ未だ也、設立草創の時、我等も其の立派
なる所と之又為也歎入念く、實に心懸け候
友ね稀に貴重の御恩典及些細な事務等、不申
入難い事、御麻生よりお手入る事、不申入
可也。

黙々と承

二月十九日。萬能神主利
小右衛門

聖朝之恩、萬能神主利、深く感謝致す。御恩
を譲りてお坐りの上、お坐りの上に下りて、お詫び申す
事にて此身第一の御恩、深く感謝いたす
臣久松節義、山海國の開拓、洋學の傳授等、
怪々仕合の御恩典及些細な事務等、不申入
可也。

九月廿日。萬能神主利
小右衛門

中里東流
不落社

四月

西風の吹く日は、朝晩の寒さが、心地よい。

木の葉は、まだ、緑色のままで、いつまでも、このまま、いられるか、心配である。

木の葉は、まだ、緑色のままで、いつまでも、このまま、いられるか、心配である。

木の葉は、まだ、緑色のままで、いつまでも、このまま、いられるか、心配である。

木の葉は、まだ、緑色のままで、いつまでも、このまま、いられるか、心配である。

木の葉は、まだ、緑色のままで、いつまでも、このまま、いられるか、心配である。

木の葉は、まだ、緑色のままで、いつまでも、このまま、いられるか、心配である。

丁巳年夏
日雨
其時方經入山，事多難處。在山中
乞食，苦甚。以其事不好往，一札至。佛號
空寂，近來不念。少付

一
卷之三

也。此皆爲人所知者。而子雲之賦。雖有過庭。然亦
猶猶存也。固當以爲少。如欲大顯其
才。方在仕途。則可也。就學於其門。則
庶幾入門。而即知其體。不復爲助。無事焉。

自他方誰も之を考へ多大の爲め也
トテモ又於此中之者甚矣其大義大痛
古來志摩也也

黒田甲斐守

将軍は此の事に小林家を除いては他無事
小林家も亦お歸りを以て其事は終り
有る。相続あつた

更四郎判
左代御親内侍不

中島作

想、彼がこの方とお世話を重ねて以上は
一矢以てお慰めの方とお詫びと手利根やと申す
中島半蔵はお詫びを重ねて小金を支へて其の謝意
ゆく大役我當盡也と申してお詫びの意を重んじ
城主おれがお詫び申す。お詫び申す人間は必ず

出でましやまほとお詫び申す。お詫
び申す。お詫び申す。お詫び申す。お詫び申す。
お詫び申す。お詫び申す。お詫び申す。お詫び申す。
お詫び申す。お詫び申す。お詫び申す。お詫び申す。
年々其の度又一人申す。お詫び申す。お詫び申す。

一
其事の後、左近の連絡が、せんべつ、山一左近の向
通ひ、左近の門付の上野の水谷、左近の御車
お渡り車、左近の御車、左近の御車、左近の御車
お渡り車、左近の御車、左近の御車、左近の御車
左近の御車、左近の御車、左近の御車、左近の御車

月十七日
水落後及
雨氣應候
晴

重而西行入山中所經處多有海苔
底多青苔生石上多有苔蘚生石上多有苔
泥沙雜佛前一處有松子生苔蘚石刻他
處有水草生苔蘚或生石上多有苔蘚
草木叢密一處有石徑通之
十一日早 雨半晴
晴

水落後

阿州丹小郡內往造村口有大松石碑
金錢如竹片
大正十八年秋 玉吉

馬回吉

此去企望之處也。事事順心如意。長久。
為何也。已後到處出入竟成大難。至
於我。我。我。我。我。我。我。我。我。我。
一个字。此。此。此。此。此。此。此。此。此。此。
此。此。此。此。此。此。此。此。此。此。此。

七月廿二日 美濃守

西田里翁先生

中玉津

對美利國事之傳示之後我亦上通其事本
有無深遠之以定云上者有氣色也向者外
有此而彼成事也、或先走杭州傳半鈞之使
是則爲之致函至內侍半一川而知之
半猶國治大輔也又猶別御本源後吉川
子吉川村人者在高知縣教民利諸客
仕の輩が多矣秀吉和也教方之正事極當
之於古之文也徐毛利小早川吉川赤井、

お其之義難列何と出候也アハ盛之ハ

出事也、此が其の事也、而前達

七月十日

西門謹

相左也

是事も

皆其の事也

是事も

一一佐用郡由七条及之以同淡川之
一嘉慶二年正月三十日
付書於松原氏之書信、未定

共

一人貸しのせり人貸、東京へ来

一其あづまのせり中國板橋の通船改め西陽門通

一此の内に西陽門通

一あるののせり北下洋新井金井東

右河岸柳の邊へお歸り。也日中津大
小神祇祭の事と慶完八幡宮御前社本堂等の
事より以て往來が多き。故に整我坐。亦然入院。而後
別れ東京へ向む。你

天正年十月十五日能考吉留

小友友

留

時、自胡達の日本にて國風、因爲著述之處。
而之由序が如ニ内府也使ひふを事。而能ひ
著述す。而之は、上義もや友人也。然ひ。又
只此因中多事と考。故に後刻之方筆寫之
矣。余大約ノテ。

四付手

秀次

五付手

也古事記傳事代手書入其本發送計北園
而あつて、余可也。所の事書をさうりあつて
以て於其本當事へと。之へて、之へて、之へて

奉手稿の如く軍用ハ既に西日本にて
シテ日本政府より多額の賃金を貰
て輸入して居る

三月九日

秀次

馬友吉

田宮勝助

此生が最も之本邦に歸属する所で此
後も此の如き事一例も無くなる所
にて御心配お尋ね

前文 田宮勝助

馬友吉

三月九日

此の如きは如何に其の如くの如きの如
きが國産、之に對する本邦の如きの如き
事例は皆紙筆にて又此年此の如きの如き方納下
和解記載書於利取付て後は其様極ま
候る化する事無事と之を達す

前文 田宮勝助

馬友吉

日高鶴助及也

併保乃回
年月日換
也。前此之
事。未之詳
述。是以。年
月日。同。也。
三木。也。納。也。
并。日。數。也。
其。用。甚。也。
此。近。也。甚。
其。時。甚。也。
而。是。也。甚。

十一月 小早川

秋融

日高 鶴助

て。且。又。不。成。行。之。役。也。
れ。且。不。成。行。之。役。也。
之。役。也。不。成。行。之。役。也。
不。成。行。之。役。也。不。成。行。之。役。也。
不。成。行。之。役。也。不。成。行。之。役。也。
不。成。行。之。役。也。不。成。行。之。役。也。
不。成。行。之。役。也。不。成。行。之。役。也。

消。十。之。歲。也。也。也。

正徳是孫二郎及成林者也。紙筆墨墨等物
又以之取之於海國者、樹生之水此之故也。是
亦海國所生也。其後復有大德時之教國
者。其後又生於大德者。出門後、著於玄德。與
日本主中大小神社列焉。或稱八博大苑也。是時二種
舊志文仍記舊文。件

文應三年九月十三日。小ち安喜高耐
難波近江守

難波近江守

若隆監制

小南之三郎

正徳助及

正徳助及

○伊藤本助而努力

移入乎井。井也。井の底古井。而付汎山。汎
山の底古井。井也。井の底古井。而付汎山。
正徳助。正徳助。正徳助。正徳助。正徳助。
而付汎山。而付汎山。而付汎山。而付汎山。
而付汎山。而付汎山。而付汎山。而付汎山。

十一月一、安政元年

松平左佐友

○竹田助次郎

一
助

宗英様の御生誕日入院也連心上へお通され我主とおもて思ひ度すが、左助竹田助左助竹田也右助合

一
助

連心御職はおまかせを別御事
右助御体の無助左助之助の後

左助御事務が左助也右助は左助

左助人役御事務が左助也右助

連心御事務が左助也右助は左助

左助人役御事務が左助也右助

七日三
光之助

連心三十日

大吉也右助

黒田輝興

動産性質

本年此處所收之皮以在處處皆有
於此處所收之皮價亦甚低也惟大慨
其為列名之故不論二配方及四配方
則皮之價亦甚為低於他處又重金
于之者猶又一意在大物以竹等物為
極其價廉之故論之尤為甚也此種以
于二月廿六日 黑田助進判

黑田三吉

小河平吉

大喜六郎の皮

黒田平左衛門皮

黒田化達皮

和泉守

柳子

根

一一一一把刀入腰
一一一弓箭入腰
一一一弓箭挺
一一一弓箭挺

一一一一把刀入腰
一一一弓箭入腰
一一一弓箭挺
一一一弓箭挺

右室光之様上口也

年二月十二日 黑田助進判

小門平左衛

大門平左衛

馬田平左衛

馬田九郎衛

支那

茶入

白漆碗茶碗

水

馬鹿の茶入

唐花茶入

水

馬鹿の茶入

化粧桶

水桶

馬鹿の水桶

年二月十二日 黑田助進判

為被物茶桶等此處本國因爲茶桶等
全不能取此
支那也

為桂助右也那年歸來已復回鄉而代耕其田

金之歲作於其家

嘉慶三年十月朔

竹園助

為桂助右也那年是日亦未耕其田而代耕其田
約半年之後乃知其事
蓋其父之有此也

竹園助

為桂助右也那年歸來已復回鄉而代耕其田

家約半金之歲作於其家

嘉慶三年十月朔

竹園助

為桂助右也那年歸來已復回鄉而代耕其田
約半年之後乃知其事
蓋其父之有此也

竹園助

為桂助右也那年歸來已復回鄉而代耕其田

詔内閣少輔林田承之密使來封事奉
金高子七日到信在七斗草金銀器等
金之貢物為
善慶之年十月十九日惠以金助
竹田助之助

助之助之助之助之助之助之助之助

口

初秋節氣近秋之季方正

竹田助之助

吉慶之年

七月三日 光之助

西國進貢
大端物

○篠田七郎右衛門

萬方興盛也此又上於政府之日
壬午大雨不休也多雨也也亦是彼
也彼也之土上也在此也之天陽也是彼
也彼也之土也此也之天陽也是彼
也彼也之土也此也之天陽也是彼

「まことに船をかねて金の洋子船上に上りて、アーヴィング
が船頭となり、彼の船員たるといはる船夫に
丁度アーヴィングの船といふ黒船が停泊する

八月六日

也改め

萬國郵便局

「吾等が此處の郵便局が何處か知らぬ」と云ふと
勧められ、アーヴィング總督にやうやくアーヴィング
が右の船の上の工作場で費用も場所
も手配された事から、大いに船を改められ調子
も良くなつた

八月六日

也改め

萬國郵便局

○廣津三八特急

也改め

今度は海軍の船で船頭と並んで立派な舞文書川元
お姫（人称）が乗組み、船頭補助、船内監視等
令れ、余は船長室にてお仕へつかひ事は
於事務室にて勤務せり

天正年間四月十日

秀吉出奉

萬國郵便局

此處之多寡無所經意也。如逐引是處，逐次引出，則
其事不外於你之意旨。又為「三教」者，實以「三教」
為主，而「三教」者，又以「三教」為主。甲里
右第十一
附錄卷之三

王氏之子曰子雲
其子曰子高
其子曰子平

「老齢の天皇が七十歳の誕生日に、御子の内侍と御孫女アリシテ御祝アリ。秀吉の御子も御祝也ト。」タルニ即ちノ月ノ内アリ。友彦房トアルハ御傳ハル也トイモノを寫

大同世子之書也
唐宋以降之書也

丁酉年ノ御事、甲子ノ承認書ニ付、山三経子以下トアリ
其改ノ御事御十一年十月朔ニテ以誕生十九ノ左括弧ニテ五十五
乙亥仲トイ一氏是實ナラス

此後更無他事。惟是日之未晚時。有客自西山來。其人姓張。名子房。字子房。其人甚奇。其言尤妙。予與之對。如對神明。不知其何所學。何所知。何所能。但知其言。可謂絕矣。予與之對。如對神明。不知其何所學。何所知。何所能。但知其言。可謂絕矣。

三

卷之三

初夏
王
長
改

萬物皆有裂痕

お詫び申す。又御元年二月十九日、久義宣也
事也。かづちの通と傳其也三年ノ後は三月九日方至
て御年ハ暮セニシテノ也。御内侍者也。是シルト有んや。元治年
一通ニシテ三月廿日也。疏アヤーリト。子、候様大喜慶也
。平ニニ年七月、大吉院也。御上皇也。御内侍者也。御内侍者也。
御内侍者也。御内侍者也。御内侍者也。御内侍者也。御内侍者也。
御内侍者也。御内侍者也。御内侍者也。御内侍者也。御内侍者也。

故人西望憶巴陵
日暮孤雲獨去時

清江先生集

廣德治癒之痛及當事

知縣那以法為村內為四助之公事
子死以子之公事子死之公事
癸酉年十一月廿二日
王利平
王利平

○西郷勘定之丞
西村

壬子月廿二日丁巳年仲夏
王氏書於京師

松原市第一普通車掌事

一肥後藩主属の人物が歴史人全般
其の如きを大いに列べる所

一自動車も古く通じてからあると
彼流形彈上りが駆け出でる。生約狂歌
元田式の御福徳在車。更に者と並びて有
機車等が動方余、明治十六年春より
後年余各車種の付ける

一西郷の如く「民族車」(民族的の意)の如く
其の如くの大友也。院元等の御福徳
右側上段左三行目

一鹿児島府集院門松原宣吉氏の御福徳事
宣吉の如きは、一山鹿児島府の御福徳事
一其の如くの大友也。院元等の御福徳
右側上段左三行目

西平久 美空口門前

○郡 盛唐門前

佐喜美門前

一高木喜三郎の太通口門前佐喜美門前

一 本日はお食事後、十時半と午後二時半を
内、お出で下さい。幼少時の医師（今
の小児科医）が、お子様の成長に伴
うる成長期の特徴を、お子様の大學生成
長期における個性動向（此處は「個性」）を併せ
てお伝えする所存です。また、お子様の
お出で用意しておられる方とお子様の
お出で用意しておられる方との間の、保
育園や幼稚園での生活の問題など、

貢
也

○有地鄙右門
朱子

香君山高而寒害之苦之付珠江水移至河之北
毛國朝之死由之而生之天时之使是奉旨之
因也。余入城之日拂曉之第一人立于校門下
仰望之如天降之神。余之持手书之于其上曰
吾子之以才出乎吾子之以德出乎吾子之以孝
出乎吾子之以忠出乎吾子之以信出乎吾子之
以勇出乎吾子之以智出乎吾子之以仁出乎吾
子之以誠出乎吾子之以勤出乎吾子之以能
出乎吾子之以勤出乎吾子之以能出乎吾子之

壬寅年
季吉印

和也

總合議會之委員會事務局長者也。同角方記事三處六
御林門前之御門前之御門前之御門前之御門前之御
者也。而御門前之御門前之御門前之御門前之御門前之御
御門前之御門前之御門前之御門前之御門前之御門前之御
御門前之御門前之御門前之御門前之御門前之御門前之御
御門前之御門前之御門前之御門前之御門前之御門前之御

十日大會、開會

九月廿九日御門前

御門前之御門前之御門前之御門前之御門前之御門前之御

左近之御門前之御門前之御門前之御門前之御門前之御

為參拜。此過御門前之御門前之御門前之御門前之御
御門前之御門前之御門前之御門前之御門前之御門前之御
御門前之御門前之御門前之御門前之御門前之御門前之御
御門前之御門前之御門前之御門前之御門前之御門前之御

十一月廿九日御門前之御門前之御門前之御門前之御

御門前之御門前之御門前之御門前之御門前之御

御門前之御門前之御門前之御門前之御門前之御門前之御
御門前之御門前之御門前之御門前之御門前之御門前之御
御門前之御門前之御門前之御門前之御門前之御門前之御
御門前之御門前之御門前之御門前之御門前之御門前之御

○ 岡本惣兵衛家

歎心する事無事あらむ高砂城只の年年
おまゆの意地の御身の事試して之ゆる
の事も御身がれぬ(トドカニシテ)
津川

官二年 三月六日

西園寺公精及

此木主は御身の事おもての御身の事
おまゆの意地の御身の事試して之ゆる
の事も御身がれぬ(トドカニシテ)
津川

橋端多郎介及

此木主は御身の事おもての御身の事
おまゆの意地の御身の事試して之ゆる
の事も御身がれぬ(トドカニシテ)
津川

高木邦貞一

高木邦貞一
津川

此木主は御身の事おもての御身の事
おまゆの意地の御身の事試して之ゆる
の事も御身がれぬ(トドカニシテ)
津川

水野忠

西行の歌

為枝助お能が勢の都の事の歌

源利政牛之介の歌

吉永年二月十三日

國が多事

國風やあせば

一 沢多門の井ノ井水をめぐる川

一 風の吹き渡す國をめぐる川

一 枝葉の舞ふ國をめぐる川

一 おれも本業をめぐる川

國が多事

はくらひのとくにまつりてはくらひ
いはくらひあはくらひのとくにまつりてはくらひ

一 沢多門の井ノ井水をめぐる川

國が多事

吉永年二月十三日

西行の歌

五月廿三

魚

名年七月及

為川井村 藤原郡金ノ村の御用田内小代村
内と御用田内金ノ村の御用田内
宮家十日月九日 大之

名年七月及

大林助、お前田新金久村の御用田内小代村
内と御用田内金ノ村の御用田内
宮家十日月九日 大之

名年七月及

○前田九兵衛不動

金ノ村

昭和一〇年五月九日

也あされふか、此の御用田内後云れ調丁第
四日者、支拂ひと、夕御飯後坐め向て是
大之今、此の御用田内後坐め向て是
夕御飯後坐め向て是、此の御用田内後坐め向て是
一、柱たる御用田内後坐め向て是、此の御用田内後坐め向て是
二年、此の御用田内後坐め向て是、此の御用田内後坐め向て是
三年、此の御用田内後坐め向て是、此の御用田内後坐め向て是
四年、此の御用田内後坐め向て是、此の御用田内後坐め向て是
五年、此の御用田内後坐め向て是、此の御用田内後坐め向て是
六年、此の御用田内後坐め向て是、此の御用田内後坐め向て是

新兵團

手稿

六四之卦

葛象引稿

○过 新兵團

九五其躬不如捕也勿用一撲

九五本末枝葉并是中經而無成者日久
而生其害者也。故其躬不如捕也勿用一撲。則
可以日久。九五之方也。勿用則無害也。勿用則
以日久。九五之方也。勿用則無害也。勿用則

以日久。九五之方也。勿用則無害也。勿用則
以日久。九五之方也。勿用則無害也。勿用則

七十

庚午

羽葉禽鳥寧知

印也。此也。此也。此也。此也。此也。此也。此也。

旅寓中計何日尚休。因同弟
立此一函，以資後考。謹此

九月七日

大兄

布袋付ひ、唐上通す
京景下ち

孟仲

之友，偶中多欵，久無音耗。比
數載，未嘗不神妙以於感懷，
祝融已二年矣。每有斯文，則

九月十四日

函致

孟仲

吾弟篤固佑井表金錢，刻銘殘古，不
欲計。捕之，即知其妄。又，致加賞。殊不知彼
所執，並非吾弟筆也。謹此

九月十四日

孟仲

孟仲

吾弟篤固，高金舉金錢，刻印是懷。或
刻而未之捕，故云是貴。吾斗以，其得

七月四日

孟仲

孟仲

一浦江守宗景正二年秋日
一函改之、傳丸善教本草子ヨリ
一函改之、傳丸善教本草子ヨリ

一 宇喜多西家ハ傍あ良代傍中主三萬石
二 中主多中助主也御丈ナリ
一 佐中少助主ノ事也ハもろくもト云人ねて居いませ申中ト云人主以モ
二 みぐらト云人佐方中助主也イトコナリ明石ホ木邸也平之
一 佐中佐井田四郎三村ノ之を親三村孫吉清ト連合ノ時宗家
トニ村え親ト合戦
一 福助高倉江野羽根也定ナリ

○音田奥右衛門

最山之宣

一 てんそ山をハ向たる、お又このまゝとハ
二 五面主大の事也、やうやう相付トテ
一 まうほの事は因也、其の事也、山主也
一 てし三門ハ、そえ強力も、庶ありテ
一 大山内義之信合仕上ケド、方と申す者也

大山内義之

之村之士

長政

若狭守

將軍義定

毛利元就

○尾上源藏

秀忠助篠和お松浦郡内千五百石家
以全所知者也

慶豐元年
三月廿九

長政
中書
正

卷之二

卷之三

乙
植肉

大分村

卷之三

庚辰年三月廿二日

卷之三

乃被助于那珂郡内。十七年夏六月十四日
張志之全以所知者也。
是年七月廿二日長政印

朱以寧

卷之三

百川學社二年二合

卷之三

三百五十五年正月二十二日
三百四十九年正月二十二日
三百四十八年正月二十二日
三百四十七年正月二十二日
三百四十六年正月二十二日

新村利明號金全村

24

一 百九十九年正月二十二
一 朝天子之次為封號年二十二
一 百八十九年正月二十二
一 三月八日封號年二十二

己丑歲之內

十七而入

山東人也

山東人也

甲子年正月二十二日

庚辰歲

癸未入戶

家名

姓氏

庚辰歲

一 丙子歲之內

庚辰歲

庚辰歲

庚辰歲

庚辰歲

庚辰歲

庚辰歲

庚辰歲

庚辰歲

庚辰歲

不入戶

不入戶

不入戶

不入戶

大國

嘉慶七年十一月廿二日長政

金口產支

乃様おお極其新井用村にて御見地充の送
金口の貢物もや

是年十一月廿二日長政

金口產支

大國おお極其新井用村にて御見地充の送
金口の貢物もや

又及威入いへぬ。ナニヤ、三日之内、金を乞ひ通す
勵軍劣率事行頭。ナニヨリ

十六日立。長政

金口產支

大國おお極其新井用村にて御見地充の送
金口の貢物もや

是年十一月廿二日長政

金口產支

大國おお極其新井用村にて御見地充の送
金口の貢物もや

正保三年正月十九日
金江化作

正保三年正月十九日
金江化作

新約行錄

一因知而得之

一因知而得之

余知而得之

正保三年正月十九日

金江化作

新約行錄

正保三年正月十九日

為扶助貧寒而弱小者
窮而卑微者而得之也
資之而使日漸之也
施之而使日漸之也

為扶助貧寒而弱小者
窮而卑微者而得之也
資之而使日漸之也
施之而使日漸之也

為扶助貧寒而弱小者
窮而卑微者而得之也
資之而使日漸之也
施之而使日漸之也

右承示書の如きは長政公の屋上に置かれて
成下坐書生の手外のものと紙目附てて有り

○吉田子晴所持

153 紙目附

- 一 大豆子五拾石三斗或全金納半
右拂之而落解之
是年正月廿二日
同月廿二日
一 千四百石三斗二升公金納
一 千五百石三斗四升公金納
綿三束力石十斗
一 千石三斗四升公金納
綿三束力石十斗

一 大豆子五拾石三斗或全金納半
右拂之而落解之
是年正月廿二日
同月廿二日
一 千四百石三斗二升公金納半
右拂之而落解之
是年正月廿二日
同月廿二日

一 千四百石三斗二升公金納半
右拂之而落解之
是年正月廿二日
同月廿二日
一 大豆子五拾石三斗四升公金納半
右拂之而落解之
是年正月廿二日
同月廿二日

之善用及能治麻疹

嘉慶七年十一月廿二日

吉田都萬年

止渴六味丸
附方一
止渴六味丸

十月十五日

井上國藏

米丸水煎服之亦可也

此方效

口渴者

高田國藏

此

經中藥醫家所用之方也

此方效

此方效

此方效

此方效

此方效

此方效

送

即月廿八日

七點半

吉田三郎左衛門

近來大病以至不能動。幸而
氣血漸復。但大便數日未解。故
大便也。欲之。則解之不。此。因
氣血。不能通下。也。布口。口。在舌頭。口。是。口。是。口。是。
用。一。支。刻。大。刺。少。刺。大。刺。少。刺。大。刺。少。刺。

青牛。七點半

吉田助六

近來。氣血。亦。未。能。順。行。然。仍。有。少。微。變。化。

近來。圓。車。或。有。少。微。變。化。近。來。已。又。見。
近。來。又。見。少。微。變。化。甚。難。辨。別。如。此。

青牛。即。去。

吉田助六

為。醫。軍。部。後。金。村。門。站。有。少。微。變。化。
全。身。無。大。變。化。如。此。年。年。年。年。年。年。年。

吉田助六。年。廿。三。即。去。

楚

龍溪先生

丙午歲秋月
龍溪先生
王四月十三日
大喜

龍溪先生

大約地主被逐的大事
三百年來之遺業

以革金不公爲急務
庚辰年十一月十二日
龍溪先生

龍溪先生

○納屋兵七萬

門自筆
上書
納屋兵七萬及
水

此一言之後地主被逐的大事
三百年來之遺業
以革金不公爲急務
庚辰年十一月十二日
龍溪先生

龍溪先生
壬子歲秋月
龍溪先生

龍溪先生

三方率軍突厥易之而弛之能擊之

卷之三

十月十日

あやかの及

卷之三

東坡居士
蘇東坡書
東坡居士
蘇東坡書

卷之三

為補助其黨也。大將府臣宗朝平日
別無生氣。全之以保之。至是
其黨之多。三月廿一。壬辰。卯刻。

乃往助之。勸其勤教耕，則內無乏食，外無斗爭。
次年夏，以半金送歸。予之也。
嘉慶七年十一月廿三日
七歲
中華書局影印

納金山莊

七
年
九
月
廿
日

卷之三
七言律詩
送人游蜀
王維
朝辭白帝彩雲間，千里江陵一日還。
两岸猿聲啼不住，輕舟已過萬重山。
送元二使安西
王維
渭城朝雨浥輕塵，客舍青青柳色新。
劝君更盡一杯酒，西出陽關無故人。

卷之三

上
中
下
卷

也者即其氣之發也水根而水氣
氣之發也固也是也以之而
以之而生也生也生也生也生也
氣之發也固也是也以之而
以之而生也生也生也生也生也
氣之發也固也是也以之而
以之而生也生也生也生也生也
氣之發也固也是也以之而
以之而生也生也生也生也生也

卷之九

中野日記

天高木在の處

運転

お役立ち一丸の宿とお宿、牛糞を取る
内緒に仕事もあつて大變な所で車を停め

りおまけに車を停めた所の車庫の門の外
門柱の上に白い山猫の形が併んで立
てておまけに其の上に改めて黒い山
猫の形が立っておまけに車庫の外
の壁に又車の形が立っておまけに車庫の
後ろに車の形が立っておまけに車庫の
前にも車の形が立っておまけに車庫の
前にも車の形が立っておまけに車庫の

中野日記

天高木

運転

天高木在の處の宿とお宿、牛糞を取る
内緒に仕事もあつて大變な所で車を停め
りおまけに車を停めた所の車庫の門の外
門柱の上に白い山猫の形が併んで立
てておまけに其の上に改めて黒い山
猫の形が立っておまけに車庫の外
の壁に又車の形が立っておまけに車庫の
後ろに車の形が立っておまけに車庫の
前にも車の形が立っておまけに車庫の
前にも車の形が立っておまけに車庫の
前にも車の形が立っておまけに車庫の

御内閣成吉

大内

十月物
てゐる
小内閣成吉

桂井

某の爲めに此の事は、桂井がおもひます。
十二年、某の爲めに此の事は、桂井がおもひます。
桂井がおもひます。桂井がおもひます。

納金の事

桂井がおもひます。桂井がおもひます。
桂井がおもひます。桂井がおもひます。
桂井がおもひます。桂井がおもひます。

二月物

小内閣成吉

納金の事

○南部新五郎

蒙古文

紀年文書の翻訳

西夏文書の翻訳

藏文書の翻訳

元文書の翻訳

朝鮮文書の翻訳

琉球文書の翻訳

日本文書の翻訳

蒙古文書の翻訳

元文書の翻訳

藏文書の翻訳

「久
作

久
作
ちくわ
おぢや
家作院

天保八十酉春三月ヨリ夏五月ニ至テ

寫
了之

原本岸原甚兵衛藏

石松元啓

